

シェイクスピアの研究

中野春夫

過去十年間の中で2017年度(2016年4月～2017年3月)の成果が群を抜いて充実していたと思う。理由は明快で、2016年がシェイクスピアの没後400年にあたり、シェイクスピア劇上演や記念出版などさまざまな文化事業・イベントが自治体、研究機関で催されたからである。さらに研究者個人が長年温めていた構想をこの節目を機に形にしようとしたことも大きかったと思う。とくに単著は質量ともに優れた、長年の研究成果の結晶と言うべき好著、大著が目立った。さらに論文でも、発想や論点が印象的な論考よりも、調査・分析に費やされた時間と労力が行間から滲み出てくる成果が多かったという印象である。読んでいて充実した気分にしていただいたことに深く感謝申し上げるとともに、逆に心配ごとを一言。これからの数年間が一休みとならないことを切に願っています。

まずは刊行順で単著の紹介から。中村友紀『パブリック圏としてのイギリス演劇——シェイクスピアの時代の民衆とドラマ』(春風社、2016年4月)はタイトルが示す通りシェイクスピア時代の芝居小屋における観客の集団反応を文化史的背景から解明することを目指した意欲的な成果である。本書が手掛かりとするのは共同体のシャリパリとシェイクスピア時代の芝居小屋が共有する民衆文化的な反応であり、公的世界では処罰できない逸脱に対する社会的な意識である。第5章「文化のホメオシタシス——『ハムレット』に見る伝統の抵抗勢力」は『ハムレット』における新旧の慣習・制度の衝突を指摘したうえで、その衝突に対する文化的な観客反応を論じている点で興味深い。スキミントンやラフ・ミュージックなど随所で解説される同時代の民衆文化に関する情報も参考になる。

大井邦雄『シェイクスピアをもう一度』(玄文社、2016年7月)は演劇作品の翻訳によって16・17世紀イギリス演劇研究に大きな貢献を果たしてきた著者の学問的足跡を語ってくれる。本書は4部から成り、圧倒的な存在感を示すのが第1部の『ハムレット』に関する論考である。『ハムレット』のどこがどう面白いのかを真っ向から論じる論文が少なくなっている現在、「尼寺の場面」などの重要な場面を丁寧に論じながら全体の作品解釈にまとめ上げていく手法は職人技を感じさせる。多くの翻訳を手掛けてきた成果だと思うが、台詞が三次元的に解釈され、論じられており、テキストの読み方について若い世代の研究者は本書から様々なことを学べるはずである。第2部に掲載された著者による過去の劇評、映画評も興味深い。

三益隆一『謎の力——エリザベス朝悲劇の成立と変容』(英宝社、2016年9月)は索

回顧と展望

引を含め 926 頁に及ぶ大著である。全体は 6 部構成であり、シェイクスピアの伝記とテューダー王朝史の概説を行う第一部から始まって、シェイクスピア以前の悲劇作品(第二部)、シェイクスピア悲劇(第三部)など、最終章の悲劇批評史(第六部)まで、本書はエリザベス朝演劇研究者が射程に入れるべき対象を網羅的かつ精緻に分析している。エリザベス朝悲劇のどこがどう悲劇的なのかは扱いが難しい対象だけれども、本書は個々の論点に対し根拠を挙げながら実証的に論じていく姿勢が印象的。第三部のシェイクスピア四大悲劇論は押さえるべき論点をもれなく提示してくれ、とくに第三章の『リア王』論が親子関係の崩壊というこの劇の悲劇性の源を改めて実感させてくれる点で有益である。

勝山貴之『シェイクスピアと異教国への旅』(英宝社、2017年1月)は16世紀・17世紀イングランドの非キリスト教圏に対する地政学的イメージからシェイクスピア劇の異教国表象を解きほぐす刺激的で魅惑的な成果である。本書は6章構成で、どの章もまずはシェイクスピア劇を切り口としたうえで、外交の公式記録から交易会社パンフレット、旅行記、日誌の類まで実に多様な史料を引用することにより、同時期のイングランド王国と非キリスト教圏との文化的接触の成果をみごとに浮かび上がらせる。「モロッコ」や「ペルシャ人」などの(固有)名詞がその時代の観客にどのようなイメージを喚起させたのか、本書の文化交流史的な情報は近代初期研究全体にとって不可欠である。シャーリー三兄弟のペルシャでの活動とその演劇化を論じた第6章もシェイクスピア劇との比較で面白い。

上坪正徳『シェイクスピアとロマン派の文人たち』(中央大学出版部、2017年3月)はロマン派詩人・批評家によるシェイクスピアの神格化を詳細に検討した重厚な研究成果である。本書がまず着目するのはロマン派のキーワード“nature”であり、このキーワードを手がかりとして、ロマン派詩人たちの作品創造に関する理念がシェイクスピアの劇作術と重ね合わされていく現象をコウルリッジやキーツなど個々の例を通じて具体的に検証していく。「読まれるシェイクスピア」の伝統を定着させた19世紀の「性格批評」を網羅的に分析してくれる点、またサミュエル・ジョンソンなど古典主義者と19世紀ロマン派とでフィクションの創作理念が根本的にどう異なるかを明晰に示してくれる点で、本書はシェイクスピア受容史・批評史にとって必読書である。ロマン派批評家たちによる劇評の情報も有益。

岩田美喜『兄弟喧嘩のイギリス・アイルランド演劇』(松柏社、2017年3月)は社会関係の基礎である家族における男性2親等(兄弟)の法的な関係に注目し、イギリス・アイルランド演劇が兄弟の愛憎関係をどう表現していたかを、中世劇から19世紀末演劇までを系譜学的に分析した力作。家族関係については親子もしくは夫婦が中心に論じられることが多いけれど、本書はイギリス社会で1925年まで生き延び続ける長男単独相続制度によって鬼子のように生み出される兄弟喧嘩(不和)と階級の流動化に注

シェイクスピアの研究

目した点で優れた独創性を持つ。兄弟確執表象の歴史の流れを描きつつ、個々の場面の設定や人間関係の解説が非常に巧みであり、演劇作品の面白さがよく伝わってくる。王政復古期喜劇の兄弟表象を論じた第7章はエリザベス朝演劇研究者にとっても社会制度の比較対象として大いに参考になる。

世界共通のカルチュラル・アイコンであるからこそこの現象になるが、シェイクスピア受容の顕著な特徴は演劇研究以外の専門家や知識人や愛好家が積極的に発言してきたことにある。私たちの日本でも変わりはなく、天文学や法律、音楽、植物学などの専門家たちが有益な専門的情報を与えてくれる。堀田饒『病気を描くシェイクスピア——エリザベス朝における医療と生活』（ホーム社、2016年10月）もその一つであり、医学部教授の経歴を持つ著者によってシェイクスピア劇に登場する医学・薬学関連の用語とその背景が英文学者にも実に分かりやすく解説されている。全体は48節から成っており、四体液説に基づくシェイクスピア時代の医学理論を解説してくれる最初の11節はシェイクスピア研究者にとって重要な情報である。個人的には義理の息子（長女スザンナの夫）となる医師エドワード・ホールと知り合った頃から、シェイクスピア劇における薬品や医療行為の言及に変化があるという指摘が興味深かった。

ピーター・ミルワード『ミルワード先生のシェイクスピア講義（フィギュール彩）』橋本修一訳（彩流社、2016年11月）は二部構成で、第一部はピーター・ミルワードがジュリエットやオフィーリアなど五人の女性登場人物をキリスト教的コンテクストに留意しながら論じ、第二部では訳者によってシェイクスピア研究の基本的な情報が解説されている。

対象は演劇作品ではないけれど、17世紀後半イングランド社会の激動性を詳述した労作として福岡利裕『アフラ・ベーン——「閨秀作家」の肖像』（彩流社、2017年2月）を紹介したい。ベーンの伝記的情報や代表作の背景となる「オルノーコ伝説」はもちろんのこと、本書は同時代の政治的状況から奴隷制度、英蘭戦争、女性差別まで、アフラ・ベーンとその作品に関わる背景を可能な限り調査、分析している点が印象深い。評者はベーンの専門家ではないけれど、今後のベーン研究にとって基礎文献となるだろう一書である。第6章における奴隷貿易の解説は同時期の大西洋「三角貿易」に関する社会史の資料を詳細に紹介してくれる点で重要である。

日本シェイクスピア協会の設立55周年記念論文集『甦るシェイクスピア——没後四〇〇周年記念論集』（研究社、2016年10月）には以下の13編の論考が収録されている。篠崎実「“The rest is silence, O, o, o, o, ”——『ハムレット』の改訂をめぐる」は『ハムレット』のQ2とFへの改訂を詳細に分析することにより、この劇のメタドラマ性が生まれるプロセスをグローブ座開設とベン・ジョンソンの『気質なおし』の触発との関連から論証しようとする。議論のスケールが雄大で、かつテキストの異同等の分析も具体的で緻密。芦津かおり『『ハムレット』受容史を書き換える——堤春恵と

二〇世紀末の日本」は堤春恵『仮名手本ハムレット』(1992年初演)における日本の初期シェイクスピア受容のメタドラマ的な書き換えを文化受容史の視点から検討しつつ、現在および今後の日本におけるシェイクスピア受容史批評の可動域を意欲的に広げようとする。冬木ひろみ「記憶と五感から見る『ハムレット』」は『ハムレット』でアリストテレス主義の知覚用語が頻出し、記憶と想像が重要なモチーフとなる現象に着目した論考であるが、知覚理論の情報限の一つとしてイグナチウス・デ・ロヨラとロバート・パーソンズのカトリック信仰書を指摘した点が意義深い。英知明「印刷所の『ロミオとジュリエット』——初版原稿の生成プロセス」は『ロミオとジュリエット』Q1の生成過程が劇場での台本(バクリ)速記を想定することにより合理的に説明でき、さらに台本速記版の編集企画者としてヘンリー・チュトルをピンポイントに指摘する。読み手の興味を最後まで惹きつける展開がみごと。鶴田学「隠喩としてのキケロの手——『ジュリアス・シーザー』と雄弁術」はキケロの弁論術が帝政時代に視覚に訴える演劇的な詐術に変化する興味深い歴史的過程を指摘したうえで、弁論術におけるブルータスとアントニーの相違点をこの歴史的変化から説明しなおし、かつキケロが登場人物そのものでもこの劇で周縁化していく現象を指摘する。米谷郁子「真実という野良犬——『リア王』における「忠告」のパフォーマティヴィティについて」は「忠告」の両義的な効果を『リア王』におけるケント伯や道化、コーディリアらの忠告で分析し、『リア王』の魅力そのものと言っていい忠告者たちが観客の心を揺さぶり続けてきた現象を真つ向勝負で論証してくれる王道派の論文。

桑山智成「マクベスと役者の身体」は登場人物マクベスと生身の役者とのダイナミックな表象関係が具象から抽象、身体性から象徴性へと変化する現象を詳細に分析し、役者の身体性という言語化が難しい対象を論点として成立させ、『マクベス』批評に斬新な視角を与えている。高田茂樹「理想の君主を演じる——『ヘンリー五世』への道」はシェイクスピア歴史劇8作(二組の4部作)における歴史劇個々の関係およびシェイクスピアの劇作術の進化、1590年代の政治状況を巧みに組み合わせて論証する。河合祥一郎「『夏の夜の夢』——月の世界の constancy」は『夏の夜の夢』における伝統的な論点(夢/想像力/魔法/妖精/月の狂気)を丁寧に整理し直したうえで、テキストに基づき観客がディミートリアスとヘレナの結婚をよりすっきりと祝福できる解釈を提案する。小林潤司「『ヴェニスの商人』とユダヤ人劇の系譜——サブテキストとしての『ロンドンの三人の貴婦人』」は従来の解釈では見えてこない『ヴェニスの商人』に潜む同時代の関心や不安、欲望を『ロンドンの三人の貴婦人』をサブテキストに想定することによって炙りだし、個々の場面が同時代の観客にどう受け止められたかを新たな視点から分析している。岩田美喜「『お気に召すまま』における兄弟表象と「もしも」の効用」は伝統的な兄弟不和の関係が意図的に複雑化されるという『お気に召すまま』の特異な設定を指摘し、長男単独相続制度によって生み出される兄弟対立が観

客の「もしも」の想像力で解消されるこの劇独自のドラマトゥルギーを明らかにする。川井万里子『『終わりよければすべてよし』から——バートラムとヘレナとパローレスの空だいい』は主人公ヘレナの特異な社会的立ち位置と1600年頃の社会変動に注目し、『終わりよければすべてよし』の問題劇としての特性をヘレナの冒険的で野心的な「プロジェクト」からダイナミックに炙りだす。石塚倫子「近代初期イングランドの女性と医療——『終わりよければすべてよし』と『恵み草』ヘンルーダ」はヘンルーダの薬草としての効能と薬草で治療を行うワイズ・ウーマンを議論の軸に据え、『終わりよければすべてよし』のヘレナに同時代の家父長的な医療現場で自立的に道を切り開く「新しい女性」的なヒロイン像を見て取る。

日本シェイクスピア協会の機関誌 *Shakespeare Journal*, Vol.3 は「シェイクスピアとイスラム社会」の特集を組み、以下の4本の論考を収めている。勝山貴之「ルネサンスとイスラム世界——文化の越境と変容」はオスマン帝国とイスラム文化の視点から逆照射することにより、ルネサンス期の文学・文化テキストがさまざまな点で読み直しを迫られうることを指摘する。小沢博「海鳴りの消え入るような調べ——『十二夜』とシェイクスピアの地中海」は地中海域文化史と表現できそうな背景から『十二夜』の海難と漂着、再会という人間ドラマを鮮やかに紡ぎだしてくれる。土井雅之『『あらし』から浮かび上がる西地中海像』もシェイクスピア時代の政治的状況から地中海に対するイングランド王国のメンタルマップを再現し、『あらし』の劇世界にその地理観が投影されていた現象を分析する。末廣幹「トマス・デッカーとフィリップ・マシジンジャーによる悲劇『処女殉教者』による〈ざらし〉の戦略」はイングランド演劇における「トルコ化」表象の歴史を明らかにしつつ、「トルコ化」の不安・恐怖に対しトルコ人の「キリスト教化」を描くことにより精神的な平衡を保つという『処女殉教者』独自の興味深い戦略を指摘する。

上記の特集以外に *Shakespeare Journal* では一般公募の論文も掲載され、第3号では以下の2点が収められている。松岡浩史「ルネサンス魔術師の夢——『ロミオとジュリエット』における錬金術の表象」は『ロミオとジュリエット』においてシェイクスピアが錬金術文献で常用される奇想的イメージのみならず、金属変性作業の根幹的な理論をも恋愛表象に採り入れている現象を指摘している。檀浦麻衣「諷刺する魔女——『エドモントンの魔女』における「魔女」の形成」は現実世界の魔女裁判が『エドモントンの魔女』においてどのように脚色され、法的な「魔女」像がどのように演劇ヴァージョンへ変換されたかを考察し、日本シェイクスピア協会若手奨励賞を受賞した。

日本英文学会関西支部の機関誌『関西英文学研究』第10号には小嶋ちひろの英語論文“Female Theatricality in *A Mad World, My Masters*”が収録され、同論文はトマス・ミドルトンの『狂気の世界』におけるカーニヴァルの転覆の面白さをフランク(フランセス)のトリックスター的演技に焦点を当てながらテキストに寄り添って丁寧に

分析している。

『日本學士院紀要』第71巻第3号には玉泉八州男「イギリス・ルネサンス(文学)における国家理性」が収録されている。同論文はルネサンス期の用語「国家理性」がイングランド(文学)において「国家機密」と同義性を担い、さらには不死鳥神話やアクタイオン伝説と結びついていく進化的なプロセスをベン・ジョンソン、スペンサー、ジョン・ダン、ウォルター・ローリーの例と該博な知識で示してくれる。

論文集も論文テーマの統一が図られ、編集作業も丁寧になされたものが目立った。文学と評論社編『超自然——英米文学の視点から』(英宝社、2016年5月)は「超自然」をテーマとして「文学と評論」の会から出版された論文集であり、全13点のうちシェイクスピア劇と関連するものが3点収録されている——上村幸弘「もののけの舞台——シェイクスピア時代の超自然現象」、須賀昭代「超自然の万華鏡——シェイクスピア最後の作品より」、田邊久美子「『ランカシャーの魔女』——魔女信仰への懐疑と空想」。

熊谷次紘・松村雄二共編『シェイクスピアの作品研究——戯曲と詩、音楽』(英宝社、2016年5月)は広島を拠点とする研究グループ「シェイクスピアと現代作家の会」による没後400年記念の論文集であり、以下の10篇の論文が収められている——丸山弓貴「一八、一九世紀絵画における『夏の夜の夢』のパック像——道化、幼児、小鬼、「悪魔」、佐川昭子「『十二夜』の神話の海」、住田光子「ふたつの価値観のなかで——ジェリー・テイモアの映画『タイタス』における〈オナー・キリング〉の要素」、デイビッド・ハーリー(熊谷次紘・住田光子訳)「怒れる君主——『ロミオとジュリエット』におけるエスカラス大公の判断」、松浦美佐子「『ジュリアス・シーザー』における解体と部分へのまなざし」、松浦雄二「『リア王』における怒りとその先」、熊谷次紘「『マクベス』を観劇するジェームズ一世——魔女、大逆罪、王位継承権」、五十嵐博久「シェイクスピア劇における人物の行動規範と観客の共感の原理についての一考察」、藤澤博康「『シェイクスピアのソネット集』における黒い女再考——錬金術と黒い聖母崇拜からの考察」、富村憲貴「シェイクスピアの作品における音楽の使用——キッド、マーロウとの比較を通して」。

松田幸子・笹山敬輔・姚紅共編『異文化理解とパフォーマンス』(春風社、2016年7月)は浜名恵美氏の退官記念論集として企画され、全20本の論考のうちシェイクスピア関連のものとして以下の5点を収録している——小林かおり「『どうして旅回りなんかしている？ 都にいたほうが人気も儲けも上がるだろうに』——西洋人巡業劇団によるシェイクスピア上演」、呉佩珍「シェイクスピア翻案劇『オセロ』と植民地台湾——一九一〇年代『臺灣日日新報』を中心に」、吉原ゆかり「これ、シェイクスピア、マジで?」、エグリントンみか「攪乱的な女性身体——柿食う客『女性シェイクスピア』試論」、末松美知子「現代のシェイクスピア上演における『異性配役』の可能性——登

場人物の造形と観客反応」。

英米文化学会編『英米文学にみる検閲と発禁』（彩流社、2016年7月）は英米文化学会の分科会によって刊行された論文集であり、演劇関連の論文として以下の論考が収められている——門野泉「『チェス・ゲーム』上演禁止と劇場閉鎖」、江藤秀一編『帝国と文化——シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで』（春風社、2016年9月）には筑波大学の研究グループ「帝国と文化」を中心とする20名の執筆者が寄稿しており、近代初期イングランド文学関連として山木聖史「シェイクスピア『テンバスト』と「帝国」——「交換様式」の視点から」が収録されている。

大学紀要などの学術誌に掲載された論文には以下のものがある（姓名の50音順）——今西雅章「〈文学講座〉『ロミオとジュリエット』と転生のパラドックス——時間と空間のドラマ」、帝塚山学院大学『こだはら——大学開学50周年記念号』第39号；浦千里「シェイクスピアの『ソネット集』の世界把握」、関西大学大学院英語英米文学研究会『Poiesis』第37号；工藤敦子「*Antony and Cleopatra*における“resolution, and the brief end”の『構図』」、龍谷大学大学院英語英米文化学会『英語英米文学研究』第43・44合併号（藤谷清和教授退職記念号）；近藤直樹「Aphra Behnの『月の皇帝』論——Farceの構造について」、大阪府立大学人文社会システム科学研究科『言語文化科学研究 英米言語文化編』第12号；今野史昭「チャールズ・キーンの『ヘンリー八世』——版本の底本をめぐる断章」、『明治大学教養論集』通巻524号；酒井正志「シェイクスピアの「時間」をめぐる断章」、中京大学文化科学研究所『文化科学研究』第28巻（通巻第49号）；スミザーズ理恵「Thersitesの視点から考える*Troilus and Cressida*」、関西大学大学院英語英米文学研究会『Poiesis』第37号；鶴田学「行動という名前の病——近代初期英国の修辞学とシェイクスピアの名台詞」、『福岡大学研究部論集 A:人文科学編』Vol.16 No.3（通巻347号）；土井雅之「材源との比較から読み解くラム姉弟『シェイクスピア物語』」、『東北ロマン主義研究』第3号；中野春夫「オフィーリアの小唄——エリザベス朝イングランド社会の女性怨恨み歌」、学習院大学文学部『研究年報』第63輯；星野立子「トルストイのシェイクスピア観」、『函館英文学会』Vol. LVI；本多まりえ「『リア王』における豪華な服・甘言・宮廷文化」、早稲田大学英米文学研究会『ほらいずん』第49号；松田美佐子「墓石に彫られたフランシス・クォールズと「詩編歌」——近代初期英国におけるプロテスタント派の瞑想を巡って」、成城大学文芸学部『成城文藝』第237・238号（合併号）；正岡和恵「「愛」と「戦い」——『ロミオとジュリエット』の授業から」、『成蹊英語英文学研究』第21号。

海外の学術誌に掲載された英語論文では、松田美佐子がエンブレムブックと密接な関係をもつというプロテスタント派瞑想手引書の興味深い特性を指摘したうえで、ハムレットが「神の摂理」にたどり着くまでの一連の哲学的思索を瞑想手引書の視覚的情報の脈絡からダイナミックに捉え直した——“Devotional Emblems and Protestant

回顧と展望

Meditation in *Hamlet*”, *English Studies*, Vol.98, No.6 (published online: 03 March 2017).

本年度は大学紀要、大学英文学会機関誌でも英語論文が大変充実していて、力作がめだった(姓名のアルファベット順)——Daniel Gallimore, “Affective Expressions in Two Japanese Translations of the Gravediggers’ Scene,” *Journal of the Society of English and American Literature* (Kwansei Gakuin University) Vol. LXI Ser. No. 86; Emi Hamana, “Toward a Study of Translingual Performance of Shakespeare Worldwide with a Focus on *Henry V*,” *Essays and Studies* (Tokyo Woman’s Christian University) Vol. 63; Marie Honda, “‘Abuse’ and marginality of Bianca in *Othello*,” *Eibungaku* (Waseda University) Vol. 103; Aoi Kobayashi, “In Search of Diversity in the Theatrical Representation of ‘the Female Voice’: A Study of *As You Like It*,” *Eigoken-Kenkyu* (Ochanomizu University) Vol. 11 & 12; Tamaki Manabe, “War and Peace in *The Whore of Babylon*,” *Tsuda Review* No. 61; Kazuko Mariko, “‘Felicity’ ‘in the Body’: Allusion to Paul, Erasmus, and Apuleius in *A Midsummer Night’s Dream*,” *Reading* (Tokyo University) Vol. 37; Natsumi Mikami, “*The Winter’s Tale* and the Child,” *Eigoken-Kenkyu* (Ochanomizu University) Vol. 11 & 12; Takeshi Sakuma “Suspension in *Antony and Cleopatra*,” *Reading* (Tokyo University) Vol. 37.

演劇作品の翻訳としてはちくま文庫シリーズ 28 本目となる松岡和子訳のウィリアム・シェイクスピア『尺には尺を』(筑摩書房, 2016 年 4 月)が刊行された。訳文もさることながら、巻末に収められている「訳者あとがき」と井出新の解説「義人なし、一人だになし」が読ませる。研究書の翻訳には大井邦雄訳述のハーリー・グランヴィル＝パーカー著「優秀な劇作家から偉大な劇作家へ(3)——シェイクスピアの一大転換期のありかはどこか」、『北方文学』第 74 号がある。(学習院大学教授)